

による不安を増大させ、職員と家族は信頼関係構築の機会を失うなど在宅復帰支援にも影響が出ています。施設ではオンライン面会を推奨していますが思ったほど利用が伸びないのも事実であり悩ましいところです。

今後も各職場の緊張体制は継続すると考えられますが、気を緩めることなく看護職としてやるべきことを肃々と継続し、感染予防に努めていきたいと考えています。



私的病院で出来る感染症対策

医療法人社団厚生会 西方病院 看護師長 渡 邊 奈緒美

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、誰もが体験したことのない感染への「不安」と隣り合わせです。各医療機関では、知恵と工夫を結集し対応していますが、クラスターが発生しています。

当院は、18診療科と病床数93床を有する私的病院です。ICC委員会を週1回開催し、全国及び栃木県内の感染状況の報告・確認、院内の感染対策の具体策を検討しています。

第一に優先したことは、全職員に対する標準予防策の実地訓練でした。次に感染症疑い患者の入院対応です。一部屋1床を確保し看護体制を整え、実際に1看護単位として機能しました。

現在の外来は、午前7時30分から発熱者との振り分けを実施しています。発熱者は、専用待合で待機し診察されます。通常の待合室では「3密」対策をおこなっています。

病棟は「面会禁止」ですが、オンライン面会の導入を検討しています。職員に対し、行動自粛の範囲や健康管理について周知徹底しています。その結果、地域の皆様に安全で安心な医療環境を提供できると確信しています。



外来風景



正面玄関(振り分け外来)

新型コロナウイルス感染症対策の現状

一般財団法人とちぎメディカルセンター 管理者 秋山 初江
とちぎメディカルセンター訪問看護ステーション

目に見えない感染症の恐怖が栃木県内でも発症し、身近なものとなってから約8ヶ月が経過しました。感染予防として、マスク着用・流水手洗い・アルコール消毒はもちろんですが、当日訪問予定になっている利用者宅へ訪問前に電話し、発熱や咳などの症状がないか確認してから伺い、危険な接触を防いでいます。予防着は、布エプロンから使い捨てのビニールエプロンに変更し、水道蛇口も自動水洗へ交換するなど感染予防の環境も整えました。また、当ステーションのある栃木市内訪問介護ステーション10か所が連携し、新型コロナウイルス感染のため事業閉鎖状態になってしまった場合の対応を検証しました。閉鎖ステーションに代わり訪問し、利用者が訪問看護サービスを受けられず困ることがないよう協力体制を整えました。今後も自分自身の感染予防及び他人へ感染させないためにも、スタッフ一人一人が自分の行動に責任を持ち訪問業務を行って行きます。

